二〇一九年、中国を発生源と考えられる新型コロナウイルス（COVID-19）が世界的に流行し、日本においても、二〇二〇年から生活の在りようが大きく変化した。

その影響は日本口承文芸学会も無縁ではなく、二〇二〇年三月の研究例会は延期、六月の大会はウェブ大会として八月に研究発表のみを行う形となった。

機関誌委員会ではこうした状況に鑑みて、以下のとおり「緊急特集」を組み、投稿原稿を広く公募することとした。

＊　＊　＊

『口承文芸研究』第44号緊急特集への投稿公募について

この状況下において、会員の皆さんが耳目した事象や直面した出来事、研究者・語り手・学会員として考えることなど、ぜひ多くの方にご寄稿いただければありがたいです。

公募テーマ：緊急特集　新型コロナウイルス流行の下で（仮）

例　コロナ流行下で耳目したウワサ・ハナシなど
（国内・海外問わず）
各フィールドにおける疫病をめぐる伝承など
コロナ流行下で直面した出来事
（研究・調査環境、伝承環境の変化）など
口承文芸研究や学会のあり方について
（対面からインターネットを介した
コミュニケーションへの変化
こうした状況に学会としてどのように
対応していけばいいか）など

緊急特集「新型コロナウイルス流行と口承文芸研究」に当たって

＊　＊　＊

結果、日本国内のアマビエ論をはじめとする二〇二〇年のリアルな事例報告、アイヌ、台湾、韓国、ロシア、イギリスを含む疫病などにまつわる論考と、九本の多彩な投稿を寄せていただけた。公募の形を採ったのは、かつての民俗学において、雑誌を介して新しいテーマを寄せ合ったことを意図してのものである。大会発表の内藤造亨論文も、本特集とつながるものと言えるだろう。

併せて、学会としてどう対応したかを記録に遺すことも意義があると思い、会長はじめ、大会委員会、例会委員会、会報委員会の立場からの文章を寄せていただいた。さまざまな思いを抱いて、学会運営に当たってくださっていることが知れる。

口承文芸は、取り立てて、対面による「語る／話す／歌う」―「聴く」という関係性において成り立つ領域である。新型コロナウイルスは、こうした基本的なコミュニケーションの在りようを、大きく変容させるものとなった。ＳＮＳやオンラインといったコミュニケーション手段が発展し、情報伝達の方法や、それに伴う身体の在り方も、変わらざるを得なくなった。口承文芸という観点でこのような問題を思考・発信していくことは、重要な社会的意義があると考える。

本特集が、今後の何らかの羅針盤の役目を果たすことを希って止まない。

機関誌委員長　根岸英之（ねぎし・ひでゆき）

【緊急特集 新型コロナウイルス流行と口承文芸研究】

感染症流行下で開催された初のウェブ大会

間宮　史子（大会委員長）

二〇二〇年度の第四十四回大会は、新型コロナウイルス感染拡大の影響で、ウェブ大会という異例の開催となった。以下、本学会初のウェブ大会の顛末を記す。

今大会は本来、六月六日・七日に東京都の高千穂大学で開催される予定で、大会委員会（加藤耕義・熊野谷葉子・間宮史子）は準備を進めた。公開講演およびシンポジウムのテーマは「神話と昔話―女性神をめぐって―」、講演者は三浦佑之氏と渡邉浩司氏、シンポジウムのパネリストは沖田瑞穂氏、北原モコットゥナシ氏、坂井弘紀氏ということに決まる。二月初めに研究発表募集を通知し、三月の運営理事会で応募研究発表の採否を決定するはずだったが、三月十四日の第七十八回研究例会の実施が見送られたのに伴い、運営理事会はメール審議で行われた。メール審議による審査結果を受けて、研究発表会のプログラムを組み、十三名の発表者に連絡したのは三月末。連絡メール末尾には、「今後の新型コロナウイルスの状況がどうなるかわかりませんが、大会委員会と大会会場校は、現時点では、第四十四回大会を無事に開催できるよう祈りつつ準備を進めております」と記した。この時点で、今後の状況次第では大会参加が難しくなるかもしれないという発表者もおり、大会開催について、大会会場校の立石展大会長と相談したうえで、然るべき時期に判断しなければならないと考えた。

四月初め、日本独文学会の情報が寄せられる。独文学会は、本学会と同じ六月六日・七日に予定している春季研究発表会の開催中止を検討しているようだとのこと。私たちも開催についての方針を早急に決定するべきだと大会委員間でやりとりするうち、四月七日、七都府県に緊急事態宣言が出された。緊急事態宣言を受けて、まず立石氏と次のことを相談する。

一　六月の大会開催は断念する。今年度中の延期は日程上困難と思われるので、講演とシンポジウムは来年度の大会で行う。

二　一方、若い研究発表者の発表機会を確保するべきである。その場合、

A　研究発表者に機関誌への投稿を勧める。／B　研究発表の場を秋にでも別日程で設ける。／C　研究発表の場をネット上に設ける。

大会委員会としても、一については、登壇者の承諾を得たうえでその通りにしたい、講演とシンポジウムは、その場で多くの人に聴いてもらうことが大事だ、と考えた。

二についてはどうするか。B案は秋の学会シーズンと重なり難しいと思われるため、機関誌への投稿を勧めるA案がよいのでは、と考えたのだが、投稿が不採用となると、発表の場は失

われる。そこで、C案ということになったのだが、具体的にどうすればよいか。委員間で話し合い、独文学会で講じられる「ウェブ発表」の情報を得て、そのようなやり方なら口承文芸学会でもできるのではないかということになる。

ウェブ発表について、立石氏と大会委員会でさらに検討し、会員限定、ウェブ上に発表原稿と資料を一定期間掲載、質問や意見を記入できる機能もほしい、と考えた。そのような手立てを講じられるか、学会HPの技術的サポートを請け負ってくれている会員の佐藤皇太郎氏に尋ねることになる。四月十四日、立石氏が問い合わせると、佐藤氏は発表用のウェブページ構築を快諾してくれ、すぐに試作にかかるという。これでウェブ発表実施の目途がつき、立石氏が、機関誌委員会と機関誌の対応を検討したうえで、理事会に大会開催方法の変更を諮った。四月十六日付で送信された審議メールのうち、ウェブ発表についての骨子は以下の通りだった。

① 今年度の大会は、研究発表のみとして、研究発表はウェブ発表とする。ウェブ発表は通常の大会発表と同等の扱いとして、機関誌の彙報欄とHPにも記載する。ウェブ発表の方法：研究発表者には、二十五分の発表原稿と発表資料を、データで提出してもらう。会員が学会HPから、パスワードを使ってウェブ発表ページに入り、研究発表を閲覧できるようにする。また、質問や意見を書けるコメント欄も設ける。ウェブ発表の通知は会員へ郵送し、パスワードもそこへ表記。発表を公開する期間は、八月八日から八月二十二日。

② 今年度の研究発表予定者が今年度のウェブ発表を辞退して、同一内容で来年度大会に発表を希望する場合は、審査を行わずに発表を認める。

③ ウェブ発表を行った者は、理事会の審査を経て機関誌投稿の勧奨をうけることができる。また、発表を辞退して一般投稿を行うことも妨げない。

④ 講演とシンポジウムは、今年度の企画を来年度に行うこととして、講演者とシンポジウム担当者に打診。

理事会の承認を得て、まず、講演とシンポジウムの登壇者に承諾を得、十三名の研究発表予定者にウェブ発表を希望するか否か打診する。希望者が少なかったらどうしようかと多少危惧したが、四月末までに十名が希望し、これで「ウェブ大会」と称せるとほっとする。この頃、佐藤氏による大会ウェブサイトの試作ページが完成し、ウェブ発表のイメージをつかむことができた。

五月十一日、研究発表者十名にデータ提出についての詳細を伝えた。発表原稿と添付資料をPDF形式で提出する、その原稿と資料にはネットで流出した際の対策としてパスワードをつける、など。ウェブ発表のスケジュールは、佐藤氏と相談し、次のようにした。六月末日…データ提出締切、七月中旬…発表ページの仮仕上げ、七月末…関係者の最終チェックを経て、各種調整、発表ページの完成、八月八日～八月二十二日…発表公開。

六月に入り、大会の案内とプログラム・研究発表要旨集の作成にかかる。公開期間、大会ウェブサイトの場所、閲覧用のユーザ名とパスワードを示し、各研究発表の閲覧の仕方とコメント欄について、また、近況報告コーナーを設けたことも記す。初の試みゆえ、わかりにくくならないよう、大会委員会と佐藤氏の間でやりとりを重ねる。

六月末日までに、研究発表者十名のデータが提出された。全員が期日までに提出してくれたことに感謝する。翌七月一日、佐藤氏にデータを渡し、作業を進めてもらう。大会案内とプログラム・要旨集は、総会資料などとともに七月十日付で会員宛に送付された。七月十六日、大会サイト仮完成。各発表者に確認してもらい、必要に応じて各発表ページの修正や調整を行う。七月三十日、大会サイト完成。発表者に最終確認をしてもらい、最後の調整を行う。

八月八日、公開初日を迎えた。画像は大会サイトのトップページである。口承文芸学会なのに口頭によらないウェブ大会、この大会が盛況になるかどうかは、各発表ページのコメント欄の議論（質疑応答や意見）によって決まる。コメント欄には、閲覧者が質問等を書き込めるだけでなく、発表者もそれに対する回答を書き込むことができる。公開期間中、各発表ページのコメント欄への投稿を追うのが私の日課になった。八月二十二日、公開終了。全研究発表のコメント欄のやりとり総数は一一九件だった。発表者には二週間に渡ってコメント対応の負担をかけたが、議論は盛況だったといえ、ウェブ大会は無事終了した。

大会終了後、ウェブ発表の当事者に今大会について尋ねたところ、肯定的な意見や感想が寄せられた。共通していたのは、異例の状況下で発表の機会が与えられ、貴重な経験となった、ということ。コメント欄を使った「文字」による質疑応答については、調べてから返信することもでき有意義だった、やりとりが保存されるので振り返りができた、返信を書くことで思考の深まりを経験できた、というように、口頭発表の質疑応答とは異なる、その内容の濃さが肯定された。その一方、表情・口調等が伝えられない文字でのやりとりは、相手にどう伝わっているのか掴みづらいところもあった、という当然の意見もあった。

百年に一度という感染症流行下、大会開催を見送る学会もあるなか、初めての試みだったが、ウェブ大会を実施できて安堵している。使い勝手のよい大会ウェブサイトを構築してくれた佐藤氏、ウェブ発表に挑んでくれた十名の発表者、そして、コメント欄への投稿の有無にかかわらず閲覧することで大会に参加くださった会員諸氏に心から感謝したい。「こえ」によらないウェブ上での発表と議論は、長短含めさまざまなことに気づかせてくれた。発表者のお一人の感想に、「こえ」や「文字」、「伝える」といったテーマに関心を寄せる口承文芸学会の研究発表大会として、とても意義のある内容だったのではないか、とあったが、私も同感である。それでもやはり、次大会は対面で開催できるようにと切望する。

（まみや・ふみこ／白百合女子大学）

【緊急特集 新型コロナウイルス流行と口承文芸研究】

「非日常」から「日常」へ

―研究例会の実施をめぐって―

中村とも子・大島廣志・繁原 央・山田栄克
（例会委員会）

◆中村とも子

新型コロナウィルス感染の状況は二〇二〇年があと二月になろうとしている今でも変わっていません。今年三月の研究例会、六月の大会と、大事な研鑽の場が続けて中止や変更を余儀なくされました。秋の例会は、通常のかたちで行えるのではないかと楽観的な見通しを立てていましたが、日本の感染者は微増推移が続き、ヨーロッパを中心に諸国でも深刻な状況が報告されています。こうなってきますと、もはや、コロナと共にあることが当たり前と思って行動しなくてはなりません。十一月の研究例会はｚｏｏｍによるオンライン形式で行うことにしました。コロナ以前を「日常」、今を「非日常」と捉えるのではなく、コロナと共にある今、あるいは将来を「日常」とみて行かざるを得ないし、そうであるならば、私たちはどうしたら前に進めるのかを試行錯誤しなくてはならないと思ったからです。

例会委員の意見も思いも決して一枚岩ではありません。以下に、各人の率直な意見を記載します。そこにあるように、このようなやり方に置き去りにされてしまう会員もあるかもしれません。そこを改善する方法を模索していくことが急務です。しかし、とにかく続けていくことが学会活動の一番の基本ではないでしょうか。私が学生だった時にこの学会が創立されました。雑事を手伝っている学生たちに向かって、「学会ってね、作るのはとても大変なんだよ。でもつぶすのはすごく簡単さ。なにもやらなければいい」と、どなただったか覚えていませんが、冗談らしくおっしゃった方がありました。今はこの言葉が現実味を持っているように感じられます。私たちが追究していかねばならない学問的な問題は先が見えないほどたくさんあります。その成果を残す場として、また、自由で気のおけない学際的な交流の場として、この学会は継承されて行かねばならないと思います。

（なかむら・ともこ／東京都）

◆大島廣志

オンラインで研究例会を行うことについての「思い」を述べてくださいということですが、私はｚｏｏｍに慣れていなかったので、今回のオンライン研究例会に積極的な「思い」があるわけではありません。委員の多数によりオンライン開催が決まりましたから、ｚｏｏｍに対応し、研究例会の発表を引き受けることにいたしました。しかし、資料の添付など未だにできない状態ですから、オンラインでの研究例会発表者には難問もあるということを申し添えます。

来たるべきポストコロナを考えたとき、テーマによっては研究例会発表者全員が会場に集まるのではなく、それぞれが遠隔地にいても討議できるオンライン研究例会は、意義のある方法だと思っています。例会委員が任期中に担当する研究例会は四回ですから、そのうちの一回をオンラインで行うということを考えてもいいかと思います。

（おおしま・ひろし／東京都）

◆繁原 央

令和二年におけるコロナ禍により、世界中の社会がさまざまな変革を迫られているが、学会や研究会も同様な事態になり、模索している状況にある。そこで、この状況のメリットとデメリットについて考えてみた。

メリット

1、三密を避けるため遠隔による会の開催をすると、一箇所に集まらなくてよい。遠くの者でも簡単に参加でき、発表を聞くことができる。外国からも参加できる。

2、そのため経費負担が少なくてすむ。

3、工夫によっては新しい会員と出会える機会になるかもしれない。

デメリット

1、パソコンなどを使えない人は会に参加できない（年寄りでパソコン使用が出来ない人、機械を持っていない人の参加はなくなる）。

2、パソコン操作が不得意な人は、個人情報の流失などの不安